

# 大東文化歴史資料館だより

第9号 2010.11.30

## 大東アーカイブス 第10回 企画展

### 大東の歴史を彩る 書の巨匠たち 展

展示期間：平成22年11月1日(月)～平成23年3月31日(木)

(開室時間 毎週月～金曜日 9:00～17:00)

展示場所：大東文化歴史資料館 展示室(板橋校舎2号館1階)

—— 今回の企画展は第10回という区切りでもあることから、「大東と書道」をテーマとして書道研究所の全面協力を得て開催することとなりました。大東の歴史の中にある書の芸術と学問との交わりを感じていただければ幸いです。



本学は創立以来、東洋学術文化の振興を主旨とした教育機関であることから、その付帯文化である書道がいち早く重視された。特に昭和31年(1956年)には、教授・卒業生・在校生による「書道学会」の発足により、全国的な展覧会で会員が続々と頭角を現す。また時期を同じくして、本学書道の更なる道づくりの一環として、書道実習科目の強化による高等学校書道教員志望学生の向上、および日本文学科・中国文学科の専門学力を背景にした講座編成強化を図るため、社団法人日本書道連盟との共催による「書道公開講座」が開設された。本講座は、当時の書道界屈指の教授陣を網羅したことにより、その内容は全国の書道関係者に広く知られるようになり、学生の教育と充実を併せ「ひろく大学教育の門戸を開放」したことにより、書道教育の大いなる発展の基礎が創られた。

この発展の基礎を受けて、本学は昭和33年(1958年)の池袋校舎への移転による新制大学として再出発を機に、書は「中国学との兼修」をさらに深化させるべく、書道分野教授陣の充実が図られた。書学の加藤常賢先生(文字学)・眞田但馬先生(書論題跋・書道史)をはじめ、実技には当時の日本書道界を担う一流の書作家、山崎節堂教授・熊谷恒子教授・松井如流教授・青山杉雨教授・宇野雪村教授・上條信山先生(非常勤講師)らが名を連ね、確かなる書道教育の基盤がここに構築され、昭和42年(1967年)一東松山校舎開校による書道の組織化への気運の高まりに繋がっていく。

組織機関設立にかかる準備作業は、当時、青山杉雨(文雄)教授と永井暁舟(敏男)講師(のち助教授を経て教授)が中心となって推進され、これを松井如流(郁次郎)教授(のち名誉教授)と今関脩竹(茂)講師(のち教授)が側面から支えた。その結果翌昭和44年度(1969)年4月より、「大東文化大学書道文化センター」を開設することが理事会で承認され、以後、ここが本学書道の学内外への窓口となって、書道に関わる芸術文化事業を全国的に遂行することになり、その実績を基盤に昭和63年(1988年)には、従来の組織を「書道研究所」へ改組した。そして、2001年には本学で書道を学んだ多くの卒業生の念願であり祈願であった、全国初の「文学部書道学科」が誕生した。

本展は、昭和31年(1956年)の池袋時代から昭和42年(1967年)の東松山校舎開設を経て、平成12年(2000年)の書道学科開設から今日までの期間にスポットをあて、その期間に活躍された本学書道教員の先生方を二期に分けて、書作品を通じて本学の書の歴史的な背景を少しでも確認いただきたく、ここに纏めてみた。ご観覧いただけたら幸甚である。

今後は、創立当時から書学を中心として実績を残された、神田喜一郎先生(金石学担当)・西脇玉峰先生(説文解字担当)や・池袋時代の加藤常賢先生(文字学担当)・眞田但馬先生(書論題跋・書道史担当)などの学術資料の収集を行い、調べて継続的な展覧が開催できるよう努力していく所存である。



#### [Part I]

平成22年11月1日(月) — 平成23年1月14日(金)

(作家名)・松井如流・熊谷恒子・青山杉雨・宇野雪村・上條信山・今関脩竹・伏見冲敬・永井暁舟・古川悟・野口白汀

#### [Part II]

平成23年1月17日(月) — 平成23年3月26日(土)

(作家名)・今井凌雪・東山一郎・村上翠亭・久米公・清水透石・新井光風・田中東竹・田中節山・玉村霽山

(書道研究所事務長・書道学科兼担講師 宮里 司)

## 学園関係資料調査 書家・上條信山と松本市美術館「上條信山記念展示室」

著名な書家であり書道教育者であった上條信山（1907－1997）は、大東文化学院本科及び高等科を卒業した本学同窓生である。また、1952（昭和27）年に大東文化大学に書道講座が選択科目として設置されると非常勤講師として書道科教育法等を担当するなど書道教育に貢献、戦後大東書道の礎を築いた一人でもある。昭和57年3月に退職するまで大東の教壇に立ち続け、また書道部の活動にかかわるなど、30年間にわたり大東文化大学の書道教育に貢献した。その生涯は書家としての活動が中心ではあったが、教育者として戦後の初等中等教育機関における毛筆習字教育改革の中で活躍したほか、東京教育大学（現在の筑波大学）教授として長く書家育成に携わった。

信山は、大東文化学院に学んだ思い出を「老荘思想に特に関心のあった私には、わけても小柳先生の老荘学の講義が印象深い」「老荘の学問を自分なりに深め、かつそれを書の思想と結びつけて考えてみたくなった」と振り返り、また大東文化大学での教育体験を次のように回顧している。「実に三十年の長きにわたって大東文化大学に勤めたことになる。その間の思い出は本当に書きつくせぬものがあるが、何といっても多数の立派な先生方や、個性豊かな学生達にめぐりあえたことが最大の喜びであった。」（上條信山『硯上の塵—信山自伝—』）



信山筆「国宝松本城天守」

信山の出身地である長野県松本市の美術館内には、「上條信山記念展示室」が併設されている。晩年になって「作品を末永く保存し、今後の書教育および芸術教育に役立ててほしい」として長野県信濃教育会へ寄贈していた作品と、逝去後自宅に保管されていた作品とをあわせて、遺族より松本市へ一括して寄贈されたことを機として美術館内に展示室が設置された。同展示室では、多くの信山作品を定期的に入れ替え順次公開しているほか、信山の生前における書を通じた日中友好親善活動や書教育の発展に寄与したことなどを伝えている。

信山作品は、同美術館が所蔵しているもののほか、長野県内をはじめとして日本国内外にも数多く点在している。それらの所在や状況も松本市美術館が調査しまとめるなど、積極的な作品保護および信山研究活動が続けられている。

（大東文化歴史資料館 浅沼薫奈）



記念展示室内



県歌「信濃の国」を揮毫する信山



長野県内相森中学校に置かれた石碑

## 第9回 企画展「草創期の大東漢学」公開終了後の雑感



企画展が始まった4月に我がゼミ生に展示を見に行くように指示したのであるが、終わってみて聞いたに行かなかった学生もいた。大東文化大学の前身である大東文化学院は創立当時、修身漢文と国語漢文の2学科に分かれており、修身漢文が現在の中国学科で、国語漢文が日本文学科である。つまり中国学科は創立からの学科であり、13年後には100周年を迎えるのである。その伝統ある学科の学生が所属する学科の歴史に興味を持たないのは嘆かわしいことであるが、当今の学生に伝統と言ってもあまり興味を示さないのは、大学（学園）のイメージ作りや歴史や伝統に対する姿勢にも問題があるのかもしれない。

‘漢学’というと封建的な古めかしいイメージを抱き、そのような古くさい学問は学ぶ必要が無いと思っている人や、また戦前戦中の道徳教育が漢学と表裏一体の儒教、その説く身分社会による抑圧された教えと思っている人もいるようであるが、江戸時代の武士が漢学を学んで立身出世するのは違い、あくまでも科学的学問の対象としての‘漢学’であって、日本人の思考様式に深く関わっている漢学を知ることが、日本人のアイデンティティーの確立にも大きく関わっている。

企画展の展示が掛軸や書籍等の文物が中心で、深く掘下げた内容になっていないことは否めない。今後の展示のあり方や歴史資料館の運営について、職員や学生の積極的な意見を望んで已まない。

(大東文化歴史資料館運営委員・中国学科准教授 吉田篤志)

### \* 所蔵資料紹介 \*

## 大東文化学院 銅印

大東文化学園大金庫内に保管されていた大東文化学院時代の「銅印」。今年度、大東文化歴史資料館へ移管されました。

この銅印、実は学院時代から大東文化学園がずっと保管していたものではなく、たまたま見つけた本学職員が学園へ寄贈したものだそうです。戦火により校舎が全焼したことで、おそらく戦中戦後の混乱の中転々としてきた印は、近年になって再び大東文化へ戻ってくることができました。



### <資料寄贈ご協力のお願>

大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)では、学園に関わる資料を広く収集しています。教科書・講義ノートのほか、写真・映像、機関紙・新聞など、ご提供いただけるものや情報がありましたら、お気軽にご連絡ください。ご協力を宜しくお願いいたします。

## 「100年史編纂委員会」の設置が承認される

大東文化学園は2023年に創立100周年を迎える。この歴史的な節目を見据えて、大東文化歴史資料館では、2007（平成19）年7月に京都大学大学文書館の西山伸准教授をお迎えして「大東文化大学百年史」の編纂事業に向けた第一回事前研究会を開始した。ついで、2008年2月に「日本大学百年史」監修者の村井益雄先生、2009年7月には、九州大学文書館の折田悦郎教授を講師として順次開催し、それぞれの立場から100年史編纂事業にかかわる課題や問題点について率直にお話いただいた。こうした経緯を踏まえて、本資料館の運営委員会においては、100年史編纂体制について検討し、2009年12月に編纂準備委員会の立ち上げに向けた要望をまとめ、その取り扱いを館長に委ねることとなった。

これをうけて、山崎俊次館長は常務理事・学務局長として「大東文化学園100周年記念事業の推進及び100年史編纂体制について」と題する上申を理事長・学長に提出し、将来、理事会の下に設置されるであろう「100周年記念事業推進本部」に先行する形での「100年史編纂委員会」の立ち上げを求めていった。その結果、2010年7月28日開催の本学園理事会において「100年史編纂委員会」の設置が承認されることとなった。

本資料館においては、その専門性や位置づけを踏まえ、教員待遇の室員や専門研究者を中心とする人的配置、および学院指導者研究推進チーム・建学の精神研究推進チームなどの作業部会を整備し、「100周年記念事業推進本部」の下に置かれることになる編纂委員会へスムーズに移行できるようにしたいものである。今まさに100年史編纂に取り掛かるべき時期となったのである。

（大東文化歴史資料館運営委員・東洋研究所教授 兵頭 徹）

### 【大東アーカイブス活動記録】（2010年4月～2010年9月）

- |  |   |
|--|---|
| 4. 2 企画展入替作業                             | 6. 12 自校史教育「現代の大学」⑧                           |
| 4. 6 第9回企画展「草創期の大東漢学」公開                  | 6. 19 自校史教育「現代の大学」⑨                           |
| 4. 12 中国三江学院より展示室見学のため来館                 | 6. 28 ニューズレター『大東文化歴史資料館だより』vol.8（5月31日号）配布・発送 |
| 4. 17 自校史教育「現代の大学」①（オリエンテーション）           | 7. 3 自校史教育「現代の大学」⑩                            |
| 4. 19 東洋文化研究所より土屋竹雨書額（2点）受贈              | 7. 10 自校史教育「現代の大学」⑪                           |
| 4. 20 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会議参加（於：武蔵野美術大学）  | 7. 13 全国大学史資料協議会東日本部会幹事校会議参加（於：明治大学）          |
| 4. 22 田中稔氏より抜刷寄贈                         | 同研究会参加（於：国立公文書館）                              |
| 4. 24 自校史教育「現代の大学」②                      | 7. 15 2010年度運営委員会会議                           |
| 5. 8 自校史教育「現代の大学」③                       | 7. 30 第10回企画展について書道研究所打合せ                     |
| 5. 15 自校史教育「現代の大学」④                      | 8. 12 松本市美術館「上条信山記念室」調査訪問（～13日）               |
| 5. 20 全国大学史資料協議会東日本部会総会参加（於：愛知大学／東亜同文書院） | 9. 15 北海道同窓会支部、青桐会関係者より資料受贈                   |
| 5. 22 自校史教育「現代の大学」⑤                      | 9. 16 展示部会会議                                  |
| 5. 29 自校史教育「現代の大学」⑥                      | 9. 27 展示部会会議、書道研究所打合せ                         |
| 6. 2 歴史資料館事務室業務懇談                        | 9. 30 第9回企画展公開終了                              |
| 6. 5 自校史教育「現代の大学」⑦                       |   |